

次に愛媛県の代表的な土砂災害に関する防災風土資源の事例を2つ選び、以下に述べる。

## ウ) 愛媛県の代表的な土砂災害に関する防災風土資源の事例

### ① 竜神を祀った祠（大崩壊（おおつえ）物語）（東温市）（表5の番号18）

松山自動車道で松山から高松に向かうと、桜三里パーキングエリアを越えてしばらくして左手（北側）に皿ヶ森（標高634m）が見えてくる。この付近を中央構造線が通っており、たいへん脆い岩質となっている。

今から200年前（天明～寛政時代（1790年前後）、この地域を襲った豪雨により皿ヶ森の南斜面で大崩壊が発生した。崩壊した土砂は土石流となって下流の音田の集落を飲み込み、本谷川をせき止めた。その場所は、四国の地盤88箇所で図1、写真1、2で場所が具体的に示されている。

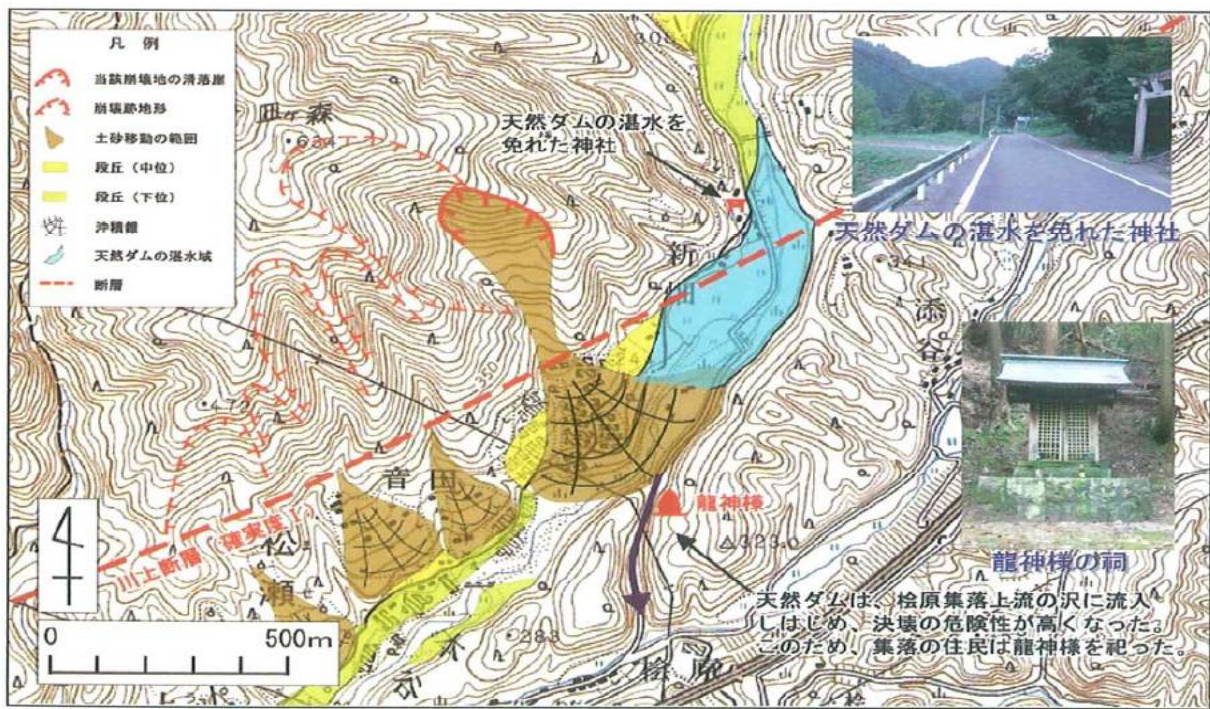


図1 音田大崩壊と天然ダム災害状況図(出典：四国山地砂防事務所：四国山地の土砂災害 2004)



写真1 音田の大崩壊 (長谷川修一氏撮影)



写真2 音田の大崩壊による河道閉塞 (長谷川修一氏撮影)

また、四国防災八十八話 66 話では、その時の様子が「大崩壊物語」として、言い伝えとして次のように紹介されている。

「昔、音田に気立ての優しい娘がいました。娘が一八の春、河之内金比羅さんの縁日に友達と参詣に出かけました。参拝の帰り道、雨滝神社にも立ち寄りました。娘達は湊のほとりでしばらく休憩

しましたが、そのうち、娘は大切にしていた櫛を思わず測の中に落としてしまいました。しかし、拾うことはできず、後ろ髪を引かれる思いで帰りました。

ある夜、娘の家に見知らぬ若者が櫛を持って訪れました。男は色白で面長の美青年でした。娘は大喜びで、両親も快く若者を家に入れてもてなしました。若者と娘の間にはほのかな恋が芽生え、若者は毎夜のように会いに来るようになりました。しかし、なぜか若者のまなざしは鋭く、どこか冷たく漂う妖気があることに娘は気づきました。不審に思った娘は、ある夜意を決して男の肌を傷つけました。驚いた若者は闇の中に逃げ去りました。娘はことの次第を両親に打ち明け、血の跡をたどっていくと、雨滝の測のそばで消えてしまいました。その頃、娘は身ごもっていました。やがて生まれた子は、蛇の子でした。驚いた一家は、思案の末に皿ヶ森の麓に葬ってしまいました。そのことを知った雨滝の蛇の精は嘆き悲しみ、黒雲を呼んで竜となって天に昇りました。すると一天にわかにかき曇り、雲は雨を呼び、竜の口は稲妻を吐き、号泣は雷となって天地にとどろきました。豪雨は七日七晩降り続いて、皿ヶ森に地鳴りが起こり、その後山津波が山裾を襲い、人家を押しつぶしました。人々は竜神様に一心不乱に祈願しました。すると、豪雨が止み、土砂も流れ去りました。人々は竜神様の加護を信じ、祠を建てて祈り、その悲話を後世に伝えています。」とある。

現地に現在もある龍神様（写真3）の祠からも「大崩壊（おおつえ）物語として地元の人々に語り継がれてきたことが分かる、自然への畏敬の念を忘れないことを教える土砂災害に関する防災風土資源といえるものである。



写真3 竜神様を祀った祠

《得られる知恵・教訓》

竜にまつわる話として土石流災害の発生を後世に伝承し、自然への畏敬の念を忘れぬことを教えている。

## ② 別子銅山遭難流亡者碑（新居浜市）（表5の番号20）

新居浜市山根町にある端心寺の西側、約100mの山側にある住友金属鉱山墓地に別子銅山遭難流亡者碑（写真1）がある。

この碑は、吉野川の支流銅山川の最上流に位置している別子銅山で明治32年の大雨による土砂災害により、死者513人にのぼる大水害が発生した、その亡くなった方を供養する碑である。

吉野川の支流銅山の最上流に位置する別子山の別子銅山は、江戸時代の元禄3年(1691)に銅の採掘を開始した。最初の坑口は新居浜市街とは反対側の南斜面にあり、「歓喜坑（かんきこう）」と名

づけられた。明治の頃はこの付近が別子銅山の中心で、採鉱と精錬が行われていた。

この流域で、明治 32 年(1899) に土砂災害により、死者 513 人にのぼる大水害が発生した。その後、採掘の中心が北斜面に移り、昭和 7 年(1932)に廃止することになった。廃止にあたり開発のため伐採された森林を元の緑の森に戻すため植林が行われ、現在は**写真 2**のように鉱山の遺構は木々に覆われている。



写真 1 別子銅山遭難流亡者碑



写真 2 現在の緑の見度足谷川流域を望む  
(四国災害アーカイブス HP より)

四国防災八十八話の 70 話の中で「時は明治 32 年(1899)、所は愛媛県の別子山村（現在の新居浜市別子山付近）でのことです。別子山村には、世界でも有数の銅山があり、多くの人が働いていました。掘り出した銅を含む鉱石溶かして銅を作る精錬過程では、有毒な亜硫酸ガスが発生します。そのため近くの山々の木々は枯れ、あたり一面はげ山が広がっていました。山が荒れてしまったため、人々は大雨が降ったら鉄砲水が出てひどいことになるかと口に言っていました。

その不安が的中する日を迎えた。その日は朝から降り続いた豪雨が夜になって止むことなく、ますます激しくなりました。はげ山となり保水機能の乏しい山肌を滝のように雨水が流れ、あちこちで山肌が崩れ、恐ろしい土砂流となって村々を襲っていきました。・・・」と紹介されている。

また四国災害アーカイブスでは、「明治 32 年（1899）8 月 28 日、台風により、別子銅山では日降水量が 325 ミリとなり、特に午後 8 時 20 分～9 時までの 40 分間に極めて強い集中豪雨があった。このため、各所で土石流が発生し、見花谷及び小足谷の従業員住宅など別子銅山の各施設が崩壊、流失した。土石流が多発した理由として、薪炭材利用のための樹木の切り倒しや精錬による煙害などにより周辺山地がはげ山になっていたことがあげられる。被害は死者 513 人、負傷者 28 人、家屋の全壊・流失 122 戸、半壊 37 戸に及んだ。（「別子銅山」等による）

さらに**写真 3、4、5**には、足谷川流域の見花谷・両見谷・風呂屋谷等で山崩れが発生した場所の現地調査写真を掲載している。

以上のようなことから、山に木々が繁茂していなかったところに大きな豪雨があり多くの犠牲者を出したこの災害は、今日、森林の保全、流域管理の教訓を伝承している防災風土資源といえる。  
《得られる知恵・教訓》

得られる教訓：開発で荒廃した山は、保水機能の乏しく土砂流を発生させ、大きな土砂災害を引き起こすことを教えている。



写真3 見花谷

(四国災害アーカイブス HP より)



写真4 両見谷

(四国災害アーカイブス HP より)



写真5 風呂屋谷

(四国災害アーカイブス HP より)

次に香川県の代表的な土砂災害に関する防災風土資源の事例を1つ選び、以下に述べる。

## エ) 香川県の代表的な土砂災害に関する防災風土資源の事例

### ① 小豆島土砂災害跡地（昭和51年）（小豆島町）（表5の番号23）

昭和51年(1976)9月の台風17号による集中豪雨は、香川県全域に被害をもたらした。その中でも、小豆島町池田の四方指観測所では9月8日12時から9月13日15時までに1,400mmという1年分に匹敵する降雨量を記録しました。この豪雨により、随所で土砂災害が起こり、小豆島町池田の谷尻地区で24名の死者を出すなど、県内各地で合わせて死者50名にのぼる大災害となった。

四国防災八十八話の82話には、谷尻地区の被災状況や自衛隊の捜索活動状況の写真(写真1、2)とともに、台風17号の時、地区総代として土砂災害を経験した人の証言が次のように掲載されている。



写真1 谷尻地区の被災状況 (香川県提供写真)



写真2 自衛隊の捜索活動状況 (香川県提供写真)

『たたきつけるような豪雨の中で、「土石流が起こった。家がつぶされ、多くの人たちが生き埋めになっているかもしれない」との第一報が入ったのに続いて、土石流災害発生のお知らせが次々に入ってきます。小豆島の全ての沢という沢で土石流が発生してしまったのではという感じさえ受けるほどです。想像も付かない、とんでもない規模の土砂災害が発生したということだけは分かりました。しかし、各種の情報が入り乱れる中、どれだけの人達が犠牲になっているのか正確な人数さえ分かりません。とにかく行方不明者の捜索を急がなければいけません。そこで、陸海自衛隊、県警機動隊、消防団員、その他、地元自治会など各方面に緊急の協力依頼をしました。